佐 々木淳君 君 作 作 Ж 詇

秋蕭々 曠野に漂泊ひて人を哭き 春静寂なる石狩 々の寮窓に倚り の

夕雲遠く友を呼ぶ

哀れ悲しき旅ならむ北斗の啓光さしそえど

暮る秋風

はた又魂

楡梢に喘ぐ郭公か 知るや無象の天の外に の波濤は荒くとも に啼く虫か の語らひか

北き 溟* ゆく 確り は名のみにして

味[®]じ は ああ孤独 い 知 に の寂寥に れる人ならで を

に語らん入相 の

白銀吼ゆる朝風な十勝の峰に断雲四十勝の峰に断雲の の峰に断手 雪雲怒り ₹)

花咲き散

'n

ぞ 春

0

Ŧ.

遷りてここに三星霜

奇〈 し き調の琴と聴き

逝に

し遊宴

女の宵の夢

たぎる情熱を篝火に

長き生命の斗争にながいのちのたたかい ただひたぶるに辿りゆく

高唱はなんかな自治の歌った。これの変化の杯を汲み交はし

何がって 自ぜん に祓所を尋めゆ の芸術変ら ねど かむ

今逍遥 の 要^みどり トの色深い の原野に萠 ゆ

哀れ愛し 清流に泛ぶ綺花 行手遙けき豊平 我が生命こそ 真なれ き絢夢なれど の 0 影が